

若年層における典型職・フリーターの内部の差異

山本 圭三

YAMAMOTO Keizo

1 問題の所在と本稿の目的

フリーター研究の分野では、フリーターと典型職（正社員）、あるいはフリーターと非フリーターという分け方に基づいた議論が多くなされてきた。そのような分け方に基づいて、フリーターたちが不利な立場に置かれやすいことや、時には「フリーターの職業意識は未成熟である」といった指摘がなされるなど、多くの知見が蓄積されてきた。

だが、研究が進むにつれて、フリーター／典型職といった単純な分け方では不十分だという指摘もみられるようになった。たとえば、小林(2006)や永吉(2006)は、「夢追求型」、「モラトリアム型」、「やむを得ず型」というフリーターの分類を用いて、生活満足度や自尊感情の違いを検討している。その結果、フリーターとその他の人々の間で生活満足度や自尊感情にはそれほど差がなく、むしろフリーターの内部で無視できない違いのあることを指摘している(小林 2006、永吉 2006)。こうした指摘は、フリーターという1つの層が同質的なものではなく、その内部でさまざまな人々が存在している可能性を示唆するものである。これまでのフリーター研究ではあまり注目されてこなかったが、より正確な議論をおこなうためにはこうした視点は非常に重要だといえる。

ただし、こうした研究においても典型職の内部の違いまで検討されることは少ないのが現状である。しかし、フリーターの中にさまざまな人々がいるとすれば、同年代の典型職の中にもさまざま

な人々がいても不思議ではない。すなわち、典型職の人々もまた同質的であるとは言い切れないのである。「正社員内部での違いにも目を向けなければ、バランスを欠いた若者像を作ってしまう恐れがある」(太郎丸・亀山 2006: 174)という指摘もあるように、少なくともフリーターの場合と同様に典型職についても内部の違いを検討する必要があるといえる。

そこで、本稿では2006年に兵庫県民を対象としておこなわれた意識調査¹⁾のデータを用いて、若年層におけるフリーター／典型職という対比を基本としつつ、さらにそれぞれの内部における差異を検討していくことにする。フリーターたちと同様、典型職の人々の内部でも違いは存在するのか。それぞれで違いがあるとするならば、それは若年層においてどのような意味をもつのか。先行研究で指摘されることの多い意識および保有する社会関係に注目しつつ、これらを体系的に明らかにしていく。そして、これまで描かれてきたフリーター像や典型職像に再検討を加え、新たな議論の可能性を探ることが本稿のねらいである。

なお、本稿では基本的に内閣府(2003)によるフリーターの定義を用いるが、若年層を「20～39歳以下」の人々とし、分析で使用するサンプルも20～39歳以下の人々に限定する。したがって、本稿におけるフリーターとは「20歳から39歳までの、現在パート・アルバイト・派遣等の非典型職業に就いている(女性は未婚のみ)」人々を指す。

2 新たな類型の設定

2.1 着眼点

フリーターと典型職、それぞれの内部の差異を探っていくにあたって、重要になるのは彼らを分ける指標である。これに関しては、大学生のフリーター志向に関するマートンのアノミー論²⁾を基軸にした視点による研究（山本 2009）が参考になる。

そこでは、フリーターとなることを許容する大学生と、正社員を志向する大学生のそれぞれがやる気の有り無し³⁾によってさらに2つに分けられ、各類型がどのような特徴を示すのかが検討されている。そして、分析の結果から(1)「フリーター化を許容する、やる気のない人々」「正社員を志向する、やる気のある人々」だけでなく、「フリーター化を許容するが、やる気はある人々」や「正社員を志向するが、やる気はない人々」なども存在している可能性があること、(2)やる気の有り無しは「文化的目標の承認」、フリーター許容志向は「制度的手段（規範の内面化）」というマートンの概念に対応すること、(3)各類型は、マートンの指摘する「同調」「儀礼主義」「革新」「逃避主義」という適応類型にそれぞれ類似した特性を示すこと、が明らかにされている（山本 2009）。

さて、この研究においてフリーター化を許容する人々、および正社員を志向する人々の内部をさらに分ける軸として使用されているのは「やる気の有り無し」である。そしてそれは、マートンが言うところの「社会における目標」すなわち日本社会における「金銭的に不自由のない生活を送ること」という文化的な目標⁴⁾の承認に対応するものとして考えられている。つまり、この研究ではフリーターを許容するかどうかだけでなく社会において強調される目標、すなわち「金銭的に不自由のない生活を送ること」という社会における1つの目標の承認が若年層の労働に対する姿勢を左右する非常に重要な軸となっている可能性が示されているといえる。

もちろん、この議論は実際のフリーターや典型職ではなく就業前の大学生を対象とするものである。だが、マートンの理論との整合性を鑑みるならば、実際に仕事をしている若年層においても成り立つ可能性は十分にある。つまり、フリーターと典型職それぞれの内部の差異を考えるにあっても「社会における目標を承認しているかどうか」というものが有効な軸になりうると考えられるのである。

以上をふまえ、本稿では次のような方針を採用することにする。まず、フリーター／典型職という「従業上の地位」は、マートンが言うところの制度的手段（制度的規範の内面化）に対応するとみなす。そして、文化的目標と考えられる「金銭的に不自由のない生活を送ること」という意見に対して賛成かどうかを、フリーター／典型職それぞれの内部の差異を探るための軸として新たに加える。マートンの議論に倣って以上の2軸を組み合わせ、新たな4つの類型を作成し、それをもとに違いを検討していくことにする。

2.2 本稿で用いる類型の設定

では次に、本稿で分析に用いる変数について説明し、それらを使って実際に類型を作成しよう。

まず、「金銭的に不自由のない生活を送ること」という文化的目標の承認に関して。調査では「**[A]** 人生の勝ち組になることは重要である」に対してそう思うかどうか、「**[B]** 高い収入を得ること」は重要かどうかについて、それぞれ5段階で回答が求められている。本稿では、これらの2変数に対して主成分分析を行い、その主成分得点を「文化的目標の承認」を表す指標として用いる

ことにする⁵⁾。そして、主成分得点が0以下の者を「目標を拒否」、0より大きい者を「目標を承認」と判断する。

次に、制度的手段に対応する従業上の地位について。調査では回答者の従業上の地位が単独でたずねられている。この質問に対し「派遣、契約・嘱託職員」「パート・アルバイト」と回答している者を「フリーター」とし、「自営業主」「会社経営者・役員」「家族従業者」「フルタイムの被雇用者」と回答している者を「典型職」とする。本稿では、従業上の地位としてこの2分類を用いることにする。

以上の2変数を用いて、類型を作成する。すなわち、フリーターのうち目標を承認している者を「フリーター・承認」、拒否している者を「フリーター・拒否」、典型職のうち目標を承認している者を「典型・承認」、拒否している者を「典型・拒否」とするのである。

表1にはマートンの適応類型と本稿の類型との概念上の対応関係を示している。表にあるように、典型職で目標を承認している「典型・承認」はマートンの適応類型のうちの「同調」に、典型職で目標を拒否している「典型・拒否」は「儀礼主義」に対応する。また、フリーターで目標を承認している「フリーター・承認」はマートンが言うところの「革新」に、フリーターで目標を拒否している「フリーター・拒否」は「逃避主義」に

対応する。

図1には、作成されたそれぞれの類型に含まれる実際的人数を示している。ごく一般的な認識からいえば、典型職の人々は目標に対して前向きであり、フリーターはそういった目標に否定的である、といった具合になる。つまり、フリーターや典型職がそれぞれ同質的な集団であれば、「典型・承認」「フリーター・拒否」のような人々がほとんどであり、それ以外はごく少ないものとなるはずである。ところが、図1を見てみると、(そもそもの人数は少ないが)4類型それぞれに一定の人々が含まれていることが分かる。すなわち、データは少なくともフリーターと典型職のそれぞれの内部が同質的ではない可能性を示しているといえる。フリーターといっても皆がみな社会の目標に対して否定的というわけでもなく、典型職だからといってすべての人が社会の目標に前向きなわけでもなさそうである。

以上より、実際にフリーターとなっている人々、典型職の人々それぞれの内部で違いが存在している可能性は見えてきた。以下では、この4類型を用いて意識の面、社会的ネットワークの面での違いを探っていくことにしよう。

表1 マートンの適応類型と本稿の類型

適応様式	文化的目標	制度的手段	本稿での類型
同調	+	+	典型・承認
革新	+	-	フリーター・承認
儀礼主義	-	+	典型・拒否
逃避主義	-	-	フリーター・拒否
反抗	±	±	-

※表中の+は「承認」、-は「拒否」、±は「一般的な価値の拒否と新しい価値の代替」を表す。

出典：Merton (1957=1961) p.129をもとに作成。

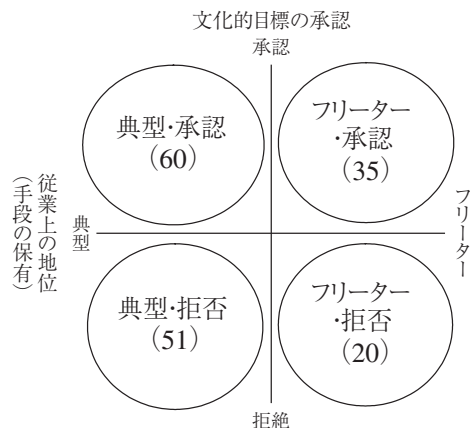


図1 本稿で用いる4類型 (カッコ内は人数)

3 類型間での意識の差異

3.1 就労意識・社会観・生活満足度の検討

これまでのフリーター研究では、フリーターたちがもつ特有の就労意識について多くの指摘がなされてきた。具体的には、フリーターとなる人々はそれ以外の人々よりも「できるだけ楽をして金儲けしたい」という安易な姿勢や働くことそのものを忌避する傾向があること、安定的な職業への志向が弱いこと、などが述べられている（小杉 2003、長須 2003、三宅 2005 など）。他に、「やりたいことへのこだわり」が強いこともしばしば指摘されている（日本労働研究機構編 2000、下村 2002 など）。冒頭で紹介した「フリーターたちの就労意識は未成熟である」という指摘も、こうした結果から導かれるものである。

また、就労意識以外では、「社会をどのようにみているのか」という社会観についてもフリーター特有の傾向があるとしばしば指摘される。たとえば、社会からの隔絶感、あるいは将来に対する閉塞感があること（上林 2003）などが明らかにされている。

しかしながら一方では、フリーターたちの就労意識がこのようにネガティブなものだとは言いきれないとする研究（亀山 2006 など）もあるし、

先に紹介した小林（2006）や永吉（2006）のような研究も存在している。これらをふまえるならば、さまざまな意識に関して本稿での4類型間で違いがある可能性は大いに考えられる。過去の知見を検討しなおす意味も含め、まずはこうした就労意識や社会観、生活満足度の分析をおこなうことにしたい。

具体的に、ここでは就労意識として「高地位志向」「名声志向」「定職志向」、社会観として「楽観的認識」「努力有効感」、そして「生活満足度」といった項目を取り上げる。使用する項目は、表2のとおりである。

就労意識、社会観、生活満足度について、類型間での平均の差の比較をおこなった結果が表3および図2である。なお、表2には4類型での平均値の差を検討した結果の前に、フリーターと典型職での平均値の差を検討した結果も示している。これらの表から、(A) まず、一般的に言われるようにフリーターと典型職の間での違いがあるかどうか分かり、そして (B) それぞれの内部で違いがあるのかどうか分かることになる。たとえば、フリーターと典型職で平均値に差が見られなかったとしても、4類型で差が見られたような場合は、フリーターや典型職というカテゴリの内部での差が大きいことを示すことになる。また、

表2 就労意識・社会観・生活満足度の項目

変数名	質問文	回答選択肢
【就労意識】	高い地位につくこと	重要である～重要ではない
高地位志向	名声を得ること	重要である～重要ではない
名声志向	生活してけるのであれば、定職に突く必要はないと思う◆	そう思う～そう思わない
定職志向		
【社会観】	これからの日本社会がどうなっていくのか、まったく見通しがたたない◆	そう思う～そう思わない
楽観的認識	今の日本は、努力が報われない社会だと思う◆	そう思う～そう思わない
努力有効感		
【生活満足度】	現在の生活に満足している	

※選択肢は、すべて5段階であり、「重要である」「そう思う」に5点…「重要ではない」「そう思わない」に1点という具合に点を与え、スコア化して分析に用いる。ただし、◆の付いた項目については、変数名に合わせて値を逆転させている。

表3 各類型の就労意識・社会観・生活満足度（平均値の差）

	高地位志向	名声志向	やりたいこと重視	定職志向	楽観的認識	努力有効感	生活満足度
全体	2.819	2.639	3.671	3.765	2.343	2.928	2.747
典型	2.842	2.544	3.605	3.877	2.345	2.974	2.798
フリーター	2.818	2.855	3.815	3.545	2.345	2.855	2.691
<i>p</i>	0.906	0.107	0.300	0.123	0.999	0.549	0.551
典型・拒否	2.373	2.039	3.392	3.725	2.490	3.353	2.765
典型・承認	3.200	2.950	3.780	4.000	2.217	2.633	2.783
フリーター・拒否	2.400	2.450	4.400	3.450	2.100	3.200	2.950
フリーター・承認	3.057	3.086	3.471	3.600	2.486	2.657	2.543
<i>p</i>	0.001	0.000	0.010	0.297	0.340	0.005	0.574

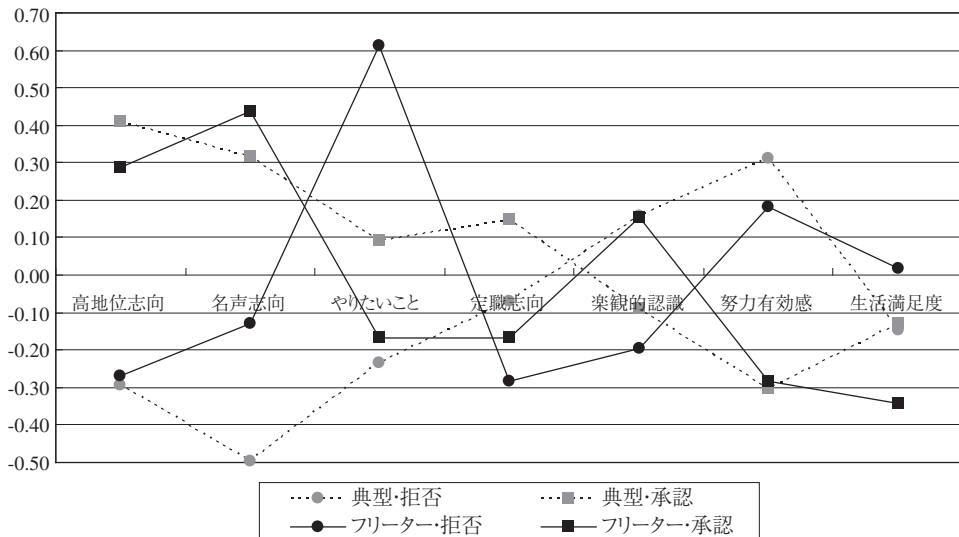


図2 各類型の就労意識・社会観・生活満足度（標準得点）

図2には類型ごとの違いをより分かりやすくするため、得点を標準化しグラフにしたものを示している。

図表から読み取れることをまとめれば、次のようになる。高地位志向に関しては、フリーターと典型職の間で大きな差は見られていない。むしろ、社会の目標を承認するかどうかの方が大きな差を生み出しているといえる。名声志向も、フリーターのほうがわずかに平均値は高いが、それよりも目標を承認するかどうかのほうが違いは大き

い。ただし、名声志向に関しては「フリーター・拒否」と「典型・拒否」の平均値にも開きがみられ、後者の低さが目立っている。

また、やりたいこと重視と定職志向に関しても、典型職よりもフリーターの方がやりたいことを重視して定職を望んでいないという傾向があるように見えるが、それほど大きな違いではないようである。だが、やりたいことを重視については4類型間、詳しく言えばフリーターの2類型間での差が大きい。「やりたいこと」を重視するの

は、同じフリーターの中でも「フリーター・拒否」の人々のようである。フリーターたちは自らが没頭できる仕事として「やりたいこと」という表現を用いざるを得ないような状況におかれていることなどが指摘されている（新谷 2004 など）が、それはフリーターの中でも特に社会の目標に対して否定的な人々の特徴なのかもしれない。

社会観についても、違いはあまりないようである。少なくとも、本稿のデータにおいてはフリーターと典型職の間で社会をどのように見るかの違いはないようである。ただし、努力有効感に関しては、フリーター／典型職という違いよりもむしろ、社会の目標を承認しているかどうかのほうが大きな違いをもたらしているようである。具体的には、「フリーター・承認」、「典型・承認」の平均値は低く、「フリーター・拒否」、「典型・拒否」は高い、という傾向が見られている。特に、「フリーター・拒否」の平均値が4類型中最も高くなっている点は注目に値すると思われる。

そして、生活満足度の結果は興味深いものである。というのも、生活満足度の平均値は、典型職－フリーター間でほとんど違いがない。さらに4類型間でも、フリーターの2類型には多少の差があるように見えるが、それも大きな差ではなく、むしろ4類型間で差があるとはいえないようである。ごく一般的に考えれば、「典型・承認」の人々がもっとも生活に満足しており、「フリーター・拒否」の人々がもっとも不満を感じていることが予想される。だが実際には、それぞれの差はほとんどなく、相対的にいえば「フリーター・拒否」の人々が一番満足している、と見ることさえできる。なぜこのような状態がもたらされているのかについては後の分析を終えてから考えることとし、ここでは興味深い事実があることをおさえておくことにしよう。

3.2 価値観の検討

ところで、本稿の類型はマートンの適応類型との対応を考慮して作成されたものである。だとすれば、就労意識や社会観とはまた別に、彼らの価値観にも違いのあることが予想される。4類型それぞれの特徴をより明確にする意味も含め、次に彼らの価値観についても検討しよう。

価値観に関する項目として、調査では、(A)「人生は自分で切り開いていくものである」、(B)「将来のことを考えるよりも、今どれだけ楽しく生活するかを考えるほうが重要だ」、(C)「社会全体のことよりも個人の生活のほうが重要だ」、(D)「これからは物質的な豊かさよりも、心の豊かさやゆとりのある生活をもとめるべきだ」、(E)「他人との競争に勝つこと」、の5つに対する意見がたずねられている⁶⁾。これらの質問をもとに、(A)を反転させたものを「なりゆき志向」、(B)を「現在志向」、(C)を「個人生活重視」、(D)を反転させたものを物質主義、(E)を競争志向としてそれぞれスコア化（5点満点）し、4類型との関連を検討していくことにする。

価値観について、先ほどと同様に類型間での平均の差の比較をおこなった結果が表4および図3である。

まず、なりゆき志向に関しては、フリーターと典型職の間で大きな差は見られておらず、4類型間でも差があるとはいえない。フリーターであるからといって、典型職よりもなりゆき任せの考え方を強くもっているわけではないようである。

現在志向については、フリーター／典型職の間で差が見られている。典型職よりもフリーターの方が、「将来よりも現在の生活のほうが重要だ」という意識が強いようである。フリーター研究の中では、「将来よりも現在」という考えはフリーターに特徴的なものであると指摘されることが多い（長須 2003、荻谷ほか 2003 など）が、本稿で

表4 各類型の価値観（平均値の差）

	なりゆき志向	現在志向	競争志向	物質主義	個人生活重視
全体	1.831	2.482	2.669	2.319	2.994
典型	1.816	2.342	2.711	2.246	2.816
フリーター	1.873	2.818	2.618	2.455	3.382
<i>p</i>	0.685	0.010	0.623	0.185	0.001
典型・拒否	1.882	2.176	2.314	1.941	2.529
典型・承認	1.750	2.433	3.017	2.517	3.033
フリーター・拒否	1.800	2.800	2.300	2.100	3.250
フリーター・承認	1.914	2.829	2.800	2.657	3.457
<i>p</i>	0.782	0.032	0.004	0.001	0.000

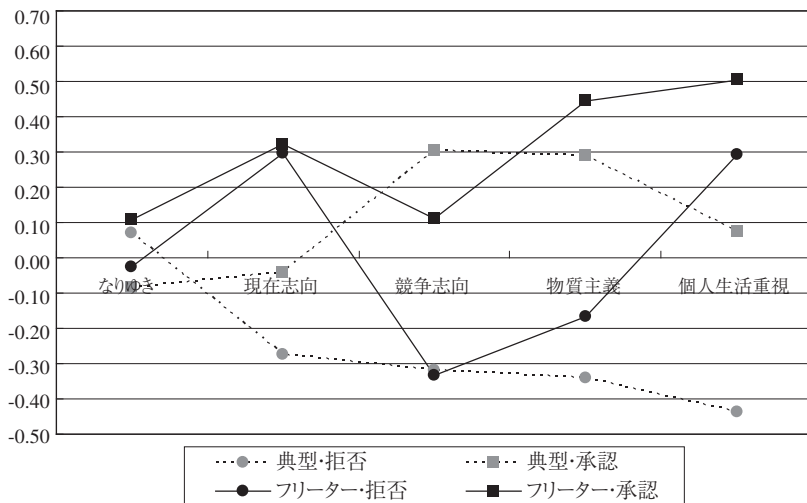


図3 各類型の価値観（標準得点）

も同様の結果が得られているといえる。ちなみに、典型職の2類型間での違いもやや見られており、どちらかといえば「典型・拒否」は現在志向が強くないようである。

競争志向や物質主義に関してはフリーターと典型職の間で差は見られていないが、先ほどの努力有効感と同様に、4類型で検討してみると違いのあることが分かる。「フリーター・承認」、「典型・承認」の値は全体平均よりも高い一方で、「フリーター・拒否」、「典型・拒否」の値はいずれも全体平均よりも低くなっている。

そして、個人生活重視は興味深い結果を示している。「典型・拒否」の平均値は全体平均を大きく下回っているのに対し、それ以外の3類型は全体平均を上回るものとなっている。一般に、フリーターたちが気にしているのは自分たちのことばかりで、彼らはあまり社会のことを考えていないと思われがちである。本稿の分析でもそのような傾向がないわけではないが、むしろ注目すべきは、だからといって典型職の人々が社会のことを考えているとも言い切れない、という点である。典型職の人々の中でも社会のことを考える姿勢を

もっているのは、現在の社会における目標にそれほど積極的ではない人々なのであり、目標に積極的な人々はどちらかといえばフリーターたちの意見に近いものがあるといえる。

3.3 各類型がもつ特徴のまとめ

ここまでの分析によって、フリーター／典型職という分け方によってなされていた議論では見られなかった、それらの内部での違いが見えてきた。ここまで見られてきた各類型の特徴を、マーソンの用いた類型と対比しつつ、ここでいったんまとめておくことにしよう。

まず、フリーター・承認の人々について。彼らは、将来の生活よりも現在の生活を重視するという刹那的な意識が強く、今の社会では努力しても無駄だと考えている。しかし同時に、他の誰よりも名声を得ることや物質的な豊かさにこだわりを抱いており、社会よりもまず個人の生活の充実をはかるべきだとしている。マーソンは、「革新」の人々は成功のために多少合法的でなくとも効果的な手段をとる傾向があるとしたが (Merton 1957 = 1961 : 135)、フリーター・承認たちの「ビッグになることをめざし、人よりもまず自分のことをやっ払いこう」という態度は、これと重なるところが大きいといえる。

典型・承認の人々は、努力の有効性は感じていないものの、フリーター・承認とは異なって刹那的な意識をもっていない。また、彼らは、名声や物質的な豊かさを目指しており、他の誰よりも競争に勝つことを重視している。つまり、彼らは他の人々に比べて現在の日本社会や自分の職業生活に前向きな態度を示しているといえることができる。マーソンの指摘している同調類型には逸脱的な側面は見られないが、典型・承認の人々の特徴もこれに類似したものであると考えて問題ないだろう。

フリーター・拒否の人々は、名声や物質的な豊かさを求めているが、努力の有効性だけは感じている、という特徴をもつ。ただし、社会よりも個人、将来よりも現在の生活を重視するという意識も強い。マーソンの述べる、「安定や威光を目指す努力を放棄」し高い地位につく資格がないと考えるなどといった社会から一定の距離をとらざるを得ない逃避主義者の傾向 (Merton 1957 = 1961 : 143) は、フリーター・拒否の人々にも共通している。

典型・拒否の人々は、他の誰よりも名声を求めず、競争に勝つことも重視していない。さらに彼らは、他の誰よりも努力の有効性を感じているものの、やりたいことへのこだわりはそれほど強くない。こうした傾向は、マーソンの「ただ与えられたもので満足している」などと表した儀礼主義の人々の人生哲学に似ていると思われる (Merton 1957 = 1961 : 138)。だが、彼らは同時に物質的な豊かさよりもゆとりある生活を求め、個人の生活ではなく社会の充実を志向している。さらに、「将来よりもまず今現在を」という意見に対して誰よりも否定的なのは彼らである。言ってみれば彼らは、儀礼主義的な側面とともに、現在の自分から少し離れて物事を考える姿勢を誰よりももっている人々なのである。

以上から分かるように、本稿で新たに設定した4類型は、マーソンの指摘する4類型に類似した特徴をもっている。これはすなわち、実際のフリーターや典型職の人々に関しても、マーソンの議論が成り立ちうることを示しているといえるだろう。

4 人々を取り巻く社会関係の差異

では次に、社会関係という実態面での各類型の違いを検討していくことにしよう。社会関係として、ここでは彼らの保有する社会的ネットワーク

の違いについて検討していくことにする。社会的ネットワークに関しては、フリーターたちのもつ社会的ネットワークは、典型職のそれよりも豊かではないことが指摘されている（沖田 2004、樋口 2006 など）。しかしながら、先の意識の分析と同様に社会的ネットワークにも違いが生じていることは十分に考えられる。そこで、本稿では、不安定な若年層においては特に重要となる「悩みを相談したり助けとなってくれたりする人々」を指す「サポートネットワーク」に注目し、量的な豊かさと質的な豊かさという2つの観点から検討していくことにする。

4.1 ネットワークサイズの検討——量的な豊かさ

まず、社会的ネットワークの量的な豊かさからみていこう。ネットワークの量的な豊かさに関する研究では、フリーターたちのネットワークは停滞的であることが明らかにされている（沖田 2004 など）。そのような結果をふまえ、「彼らは孤立状態にある（沖田 2004）」といった指摘がなされることも多い。では、彼らのそれぞれで内部における違いはないのだろうか。このことを確認するため、ここではネットワークの大きさ（サイズ）を検討しよう。

調査では、悩みを相談したり助けとなってくれたりする人（サポートネットワーク）について、具体的に何人くらいいるかということがたずねられている。この質問に対する回答をサポートネットワークサイズとして分析に用いる。

サポートネットワークサイズについて、3での分析と同様に類型間での平均の差の比較をおこなった結果が表5である（図は省略）。

表からはまず、フリーターと典型職の間でサポートネットワークサイズに差があるとはいえないことが分かる。数値自体は若干典型職のほうが高くなってはいるが、その差は決して大きいもので

表5 ネットワークの量的な豊かさの違い（平均値の差）

ネットワークサイズ	
全体	3.762
典型 フリーター	3.841 3.582
<i>p</i>	0.611
典型・拒否 典型・承認 フリーター・拒否 フリーター・承認	3.706 3.983 4.500 3.057
<i>p</i>	0.292

はないようである。

4類型の結果も有意ではなく、基本的には4類型それぞれでサポートネットワークに違いがあるとはいえないようである。ただし、平均値自体は興味深い結果を示している。というのも、典型職の2類型の値は全体平均と同程度であるのに対し、フリーターの2類型ではその差が大きくなっているのである。しかも、値が大きいのは「フリーター・拒否」であり、「フリーター・承認」の値は4類型中最も低いものとなっている。特に、「フリーター・拒否」の値が最も高いものである点は、注目に値しよう。

4.2 ネットワークの密度・多様性の検討——質的な豊かさ

次に、社会的ネットワークの質的な豊かさについてみていこう。ネットワークの質的な豊かさに関する研究では、フリーターたちのネットワークが外に開かれていない閉鎖的のものであると指摘されている。また、フリーターたちはそもそも職場でのネットワークを形成しにくいことから、彼らのネットワークはフリーターばかりの同質的なものになりやすいこともしばしば指摘されている（沖田 2004、久木元 2007 など）。そこで、本稿で

はネットワークの密度、多様性という変数を用い、類型ごとの違いを検討していく。

ネットワークの密度には、次のような変数を用いる。調査の中では、悩みを相談したり助けとなってくれたりする人を具体的に3人思い浮かべてもらい、その3人がお互いに知り合いかどうかについて、「全員がお互いに知り合い」、「お互いに知り合いではない人がいる」「全員がお互いに知り合いではない」の中から1つ選んでもらっている。この回答について、「全員がお互いに知り合い」の場合に3点、「お互いに知り合いではない人がいる」場合に2点、「全員がお互いに知り合いではない」場合に1点という具合に点数を与えたものを、「ネットワーク密度」として分析に用いる。サポートネットワークの3人が互いに知り合いであれば点数は高くなり、知り合いではないほど点数は低くなる。

また、多様性⁷⁾については、地域的な多様性と職業上の多様性の2点について検討する。調査ではサポートネットワークの主な3人について、居住地と職業がたずねられている。これらの変数を用い、ここでは次のような変数を作成した。

まず、地域的な多様性について。調査ではサポートネットワークの主な3人の居住地について、それぞれ「同居」「片道30分未満」「片道30分～1時間未満」「片道1時間～2時間未満」「片道2時間以上」のいずれかを選んでもらっている。これらに対し近いものから順に0点から4点を与え、3人分の得点を合計したものを「地域的な多様性」とした（最大12点）。したがって、自分の居住地よりも遠い人ばかり挙げていけば居住地多様性の点数が高くなり、逆に近い人ばかり挙げていけば点数は低くなる。

次に、職業について。調査ではサポートネットワークの主な3人の従業上の地位がたずねられている。これを用い、その人の従業上の地位（典

型、もしくはフリーター）が本人と同じであれば0点、本人と異なる場合に1点を与える。この値を3人それぞれについて合計し、最小0点、最大3点となるような「職業多様性」という変数を作成した。したがって、自分と異なる職業の人ばかり挙げていけば職業多様性の点数が高くなり、逆に同じ人ばかり挙げていけば点数は低くなる。

以上の変数を用いて、類型間での平均の差の比較をおこなった結果が表6および図4である。

順に結果をみていこう。まず、密度に関してはフリーターと典型職における違いはあまり見られない。また、4類型においてもそれほど差があるとは言えず、どちらかといえばそれぞれのネットワークの密度に違いはなさそうである。

地域的な多様性に関しても、フリーターと典型職の間の違い、4類型間での大きな違いは見られない。ただし、「フリーター・拒否」のネットワークにおける地域的な多様性は最も高いものとなっている点は興味深い。先ほど「フリーター・拒否」の人々のネットワークサイズは最も大きいものとなっている傾向がみられたが、ここでも類似した傾向がみられているのである。有意ではないが、この結果には注目すべきであると思われる。

表6 ネットワークの質的な豊かさの違い（平均値の差）

	ネットワーク		ネットワーク多様性
	密度	地域	職業
全体	2.395	3.877	1.404
典型	2.400	3.840	1.132
フリーター	2.380	4.135	1.939
<i>P</i>	0.869	0.516	0.000
典型・拒否	2.467	3.771	1.021
典型・承認	2.351	3.722	1.259
フリーター・拒否	2.222	4.850	2.222
フリーター・承認	2.469	3.688	1.774
<i>P</i>	0.559	0.377	0.000

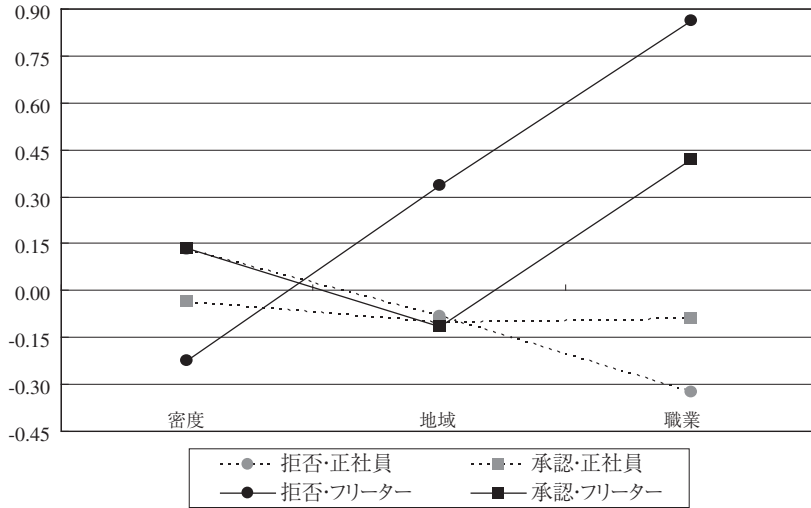


図4 ネットワークの質的な豊かさの違い（標準得点）

職業的多様性に関しては違いがはっきり見られている。まず、典型職よりもフリーターの方が職業的多様性は高い。サポートネットワークとして、典型職よりもフリーターの方がより多様な職業の人々を挙げているようである。そして、4類型間での違いも大きい。特にフリーター内部での違いが大きく、「フリーター・承認」に比べ「フリーター・拒否」の値は非常に高いものとなっている。目標を拒否しているフリーターたちがなにか困った状況におかれた場合には、自分たちと同じ立場の人々だけではなく、それ以外の人々の助けを求めることが可能になっているのである⁸⁾。このことは、典型職の人々の多様性がそれほど高くないことと対照的であるといえるだろう。

結果をまとめよう。一般的にフリーターのネットワークは豊かではないといわれていたが、その内部は同質的ではないようである。量的な豊かさの面では、フリーターの中でも社会の目標を拒否している人々のネットワークは最も豊かなものとなっている可能性がある。そして、質的な豊かさの面では、典型職の人々よりもフリーターのネットワークのほうが豊かであり、特に「フリーター

・拒否」のそれは他の誰よりも豊かなものである。

5 まとめ

本稿の分析によって、これまではフリーターや典型職などとひとくくりで考えられがちであったが、その内部における差異は大きくそれぞれが同質な集団ではない可能性が示された。フリーターといわれる人々の中にも、現代社会における目標に対してポジティブな姿勢をもつ人々が存在している。逆に、典型職といわれる人々の中でも、社会における目標に対して否定的な立場をとる人々も存在している。これまではあまり語られることがなかったが、フリーターだけでなく典型職も含め、それぞれの内部は決して同質的ではなく、むしろ大きく異なる2つのグループが存在している可能性が示されたのである。

しかも、それぞれのグループは、マートン(1957 = 1961)の適応類型に類似すると考えられる特徴を示していた。すなわち、フリーターの中には、現代の労働社会から疎外された人々だけでなく、名声を求め他者との競争もいとわないような、逸

脱的ではあるが同時に革新的な側面をもつ人々も存在している可能性がある。加えて、典型職の人々が皆社会の目標を承認しているわけでもなく、中にはそういった規範から距離を置き、名声ややりたいことへのこだわりをほとんどもたない儀礼主義的な姿勢をとる人々も存在している可能性が考えられるのである。現代社会において、フリーターたちに関するイメージが決してよくないことは言うまでもないが、本稿の結果からは、フリーターや典型職に対してなされる一面的な見方には限界があるということが出来る。

そして、マートンの議論との類似性を鑑みると、フリーター研究をはじめとする若年労働問題における重要な論点が浮び上がる。若年層の労働問題を考える上で、フリーターと典型職の人々の間にあるさまざまな格差や差異に関わる議論はいうまでもなく重要である。だが、マートンがアノミー論においても強調しているように、人々が一定の反応をとらざるを得なかった状況を生み出す、ある種の社会構造に注目することもまた重要だといえる (Merton 1957=1961)。つまり、内部での違いもふまえた上で、フリーターや典型職のそれぞれの人々に一定の態度をもたらす、現代社会において強調されている規範に注目することが、新たな研究の視点となりうるということが出来るだろう。

さらに、社会関係に焦点をあてた分析からも、示唆に富む結果が得られている。なかでも、「フリーター・拒否」「典型・拒否」が示していた傾向は重要な論点に関わるものと考えられるので、ここで指摘しておきたい。

「フリーター・拒否」は、現代社会に対して逃避的な態度をしめしており、もっとも不利な立場におかれやすい人々である。経済的な不利益をこうむることも多く、社会の規範からも疎外されている彼らは、一般的に考えれば誰よりも自身の生

活に不満を抱えていると思われるが、実際は他の人々よりも満足度が低いわけでもないようである。

このことは、彼らの周りに存在するサポート資源との関わりを連想させる。というのも、4.2での分析によって、「フリーター・拒否」が他の誰よりも豊富なサポートネットワーク、すなわちサポート資源を有していることが明らかになっている。つまり、逃避的な「フリーター・拒否」の人々の周りには誰よりも豊かなネットワークが存在しており、彼らはそのような資源に支えられることで不利な状況をのりきっている、とも考えられるのである。若年労働者に対して窮屈ともいえる規範を強調する世界がある一方で、社会から疎外されている人々に対して手を差し伸べる世界も存在している。このように対照的な2つのものが若年層の生活世界にあることにも、われわれは目を向ける必要があるといえるだろう。

また、儀礼主義に対応する「典型・拒否」の人々も、やはり現代の労働世界からはある種疎外された存在だといえる。それは、名声や競争に対しては否定的な態度をとるなどといった、こだわりがあまりない様子からも分かることである。そして彼らのネットワークは、それほど広がっているわけでもなく、密度はわずかに高く同質的なものとなっている。先の「フリーター・拒否」に比べれば、彼らの社会的ネットワークは豊かなものだとはいえないのである。しかし、注目すべき点はそのような彼らが他の誰よりも「個人よりもまず社会のことを考えたい」という意見をもっていることであり、そこからは次のことが考えられる。

彼らは、確かに現代の労働社会に対しては儀礼主義的な態度を示している。だが、それはもしかすると彼らが「経済的に安定し、自らの身を立てる」といういわば個人の問題に対して重きをおい

てないだけなのかもしれない。すなわち、彼らは現代社会の価値体系からはある程度の距離をおきつつ、自分たちと意見を同じくする人々と共に社会の問題の方を冷静に見ている、という可能性も考えられるのである。このように考えるならば、彼らの「現代の労働社会に適合的ではない」という側面だけを取り上げることは決して正当ではなく、むしろ彼らが内面に抱えているものとはとても興味深いものがあるだといえるだろう。

課題いくつも残されているが、少なくとも本稿の分析によって新たな議論の可能性を示すことはできたといえる。今後、こうしたさまざまな可能性を念頭に置きつつ、若年労働者に関してさらに多様な研究がなされていくことを筆者は期待したい。

〔付記〕

本稿は、山本圭三、2007「若年におけるフリーター・正社員問題の再検討」鶴飼孝造編『新しいコミュニティの構想 2006年兵庫県民調査報告書』に加筆・修正を施した論考である。

〔注〕

1) 本稿で用いるのは、平成16～19年度科学研究費補助金による共同研究「新しいコミュニティの構想－東部被災地域をフィールドとして」プロジェクトが実施した「兵庫県民のコミュニティと生活に関する調査」のデータである。母集団は兵庫県在住の20～69歳の男女で、市区町村を第1次抽出単位として無作為に抽出し、各地点の大きさに比例した対象者数を各市町村の住民基本台帳より合計4000人抽出した。郵送法によって調査票の配布・回収を行い、有効回収数は1088人（有効回収率27.2%）であった。データの詳細は次のとおりである（カッコ内は40歳未満の若年層275ケースのみに限定した場合の度数）。

【年齢】20歳代125、30歳代150、40歳代196、50歳代284、60歳以上330

【性別】男性483（94）、女性603（181）

【最終学歴】中学・高校511（110）、専門学校88（30）、短大・高専・大学・大学院477（134）

【従業上の地位】自営業主・家族従業員126（14）、

常勤被雇用者284（96）、派遣・パート・アルバイト233（70）、無職328（84）、その他51（5）

【婚姻状態】未婚182（134）、既婚822（132）、離死別74（8）

その他、調査についての詳細は鶴飼（2007）を参照されたい。

- 2) マートンのアノミー論に関してここで改めて詳しく紹介する必要はないと思われるので、ここでは簡単にまとめておくことにしよう。マートンは、社会に対する個人の適応様式について、(1) その社会において文化的に価値あるものとされている目標を承認しているかどうか、(2) その目標を達成するための制度的な手段に関する規範を内面化しているかどうかという2軸を抽出し、これらの2軸から同調、革新、儀礼主義、逃避、反抗の5つの適応類型を作成した。マートンはこの類型を用いてアメリカ社会における下層階級の犯罪行為などの解釈おこない、社会における目標と人々が取りうる手段との矛盾が犯罪のような逸脱的行動をもたらしたと論じた。ただし彼はそれだけでなく、この類型が種々の社会現象にも適用可能であることも強調している（Merton 1957=1961）。
- 3) 実際の分析では、やる気の有り無しを測る指標として「自己効力感」という変数が用いられている（山本 2009）。
- 4) 昨今の「ワーキング・プア」という言葉の流行が示すように、現在の日本においては労働者の経済的窮状を克明に描き出す雑誌記事や書籍がたくさん世に出されている。またその一方で、テレビや雑誌等でいわゆる「セレブ」たちが取り上げられることも多い。こうした状況を鑑みるならば、今の状況を考えれば「金銭的に不自由のない生活を送ること」が現代日本の文化的目標の1つとなっていることは容易に想像できる。
- 5) なお、主成分分析をおこなう際には、【A】【B】それぞれについて「そう思う」「重要である」に5点～「そう思わない」「重要ではない」に1点を与える形でスコア化したものを用いている。スコア化後の【A】の平均値は2.789、標準偏差は1.202、【B】の平均値は3.854、標準偏差は0.951である。また、抽出された主成分で、全分散の68.3%を説明する。
- 6) 回答選択肢は、(A)～(D)は「そう思う」～「そう思わない」、(E)は「重要である」～「重要ではない」の5段階である。
- 7) ここでは、多様で異質性の高いネットワークをもっていれば、その人のネットワークは豊かである

とみなしているが、これは以下のような理由による。石田（2004）は、緊急な相互援助が必要な状況下では同質性の高いネットワークが有効に働くが、不確実性の高い流動的な状況下ではむしろ異質性の高いネットワークが有効なサポートを提供すると述べている。若年層の労働環境は、どちらかといえば後者の不確実で流動的な状態であると考えられるため、異質性の高いネットワークのほうが有効になると判断できるからである。

8) 指標は異なるが、片瀬（2008）でも本稿の結果と類似した結果が得られている。そこでは、若年層は概して社会関係資本の蓄積途上にあり、全体として地位の向上や安定を目指して自分よりも地位の高いものをサポート源とする傾向があるのではないかと解釈されている（片瀬 2008）。「フリーター・拒否」の人々は類型の中で最も安定的ではない点を考慮すれば、本稿での結果もこうした傾向に合致するものであるとも考えられる。

〔文献〕

- 樋口明彦, 2006, 「社会的ネットワークとフリーター・ニート－若者は社会的に排除されているのか」太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』世界思想社, 49-74.
- 石田光規, 2004, 「社会関係資本 (Social Capital)－その理論的背景と研究視角」『社会学論考』25: 51-81.
- 亀山俊朗, 2006, 「フリーターの労働観－若者の労働観は未成熟か」太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』世界思想社: 144-67.
- 上林千恵子, 2003, 「大都市フリーターの行動と価値観－少数者としての高卒若年者」法政大学社会学部学会『社会志林』50(1): 1-23.
- 荻谷剛彦・濱中義隆・大島真夫・林未央・千葉勝吾, 2003, 「大都市圏高校生の進路意識と行動－普通科・進路多様校での生徒調査をもとに」『東京大学大学院教育学研究科紀要』42, 33-63.
- 片瀬一男, 2005, 『夢の行方－高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会.
- , 2008, 「若年層におけるソーシャル・サポートとディストレス」太郎丸博編『2005年SSM調査シリーズ11 若年層の社会階層と階層化』2005年SSM調査研究会.
- 小林大祐, 2006, 「フリーターの労働条件と生活－フリーターは生活に不満を感じているのか」太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』世界思想社, 97-120.
- 小杉礼子編, 2002, 『自由の代償／フリーター－現代若者の就労意識と行動』日本労働研究機構.
- , 2003, 『フリーターという生き方』勁草書房.
- 久木元真吾, 2003, 「『やりたいこと』という論理－フリーターの語りとその意図せざる帰結」『ソシオロジ』148: 73-89.
- , 2007, 「広がらない世界－若者の相談ネットワーク・就業・意識」堀有喜衣編『フリーターに滞留する若者たち』勁草書房.
- Merton, R. K., 1957, *Social Theory and Social Structure*, Revised Edition. The Free Press. (=1961, 森東吾他訳『社会理論と社会構造』みすず書房.)
- 耳塚寛明編, 2000, 『高卒無業者の教育社会学的研究』1999-2000年度科学研究費補助金研究成果報告書, お茶の水女子大学.
- 編, 2003, 『高卒無業者の教育社会学的研究 (2)』2001-2002年度科学研究費補助金研究成果報告書, お茶の水女子大学.
- 三宅義和, 2005, 「職業未決定の構造－非選抜型大学の学生の進路意識調査を通じて」居神浩・三宅義和・遠藤竜馬・松本恵美・中山一郎・畑秀和『大卒フリーター問題を考える』ミネルヴァ書房: 123-153.
- 長須正明, 2003, 「職業生活意識と無業者」耳塚寛明編『高卒無業者の教育社会学的研究 (2)』2001-2002年度科学研究費補助金研究成果報告書, お茶の水女子大学.
- 内閣府編, 2003, 『平成15年度版 国民生活白書』ぎょうせい.
- 永吉希久子, 2006, 「フリーターの自己評価－フリーターは幸せか」太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』世界思想社, 121-43.
- 日本労働研究機構, 2000, 『フリーターの意識と実態－97人へのヒアリング調査より』日本労働研究機構.
- 沖田敏恵, 2004, 「ソーシャル・ネットワークと移行」労働政策研究・研修機構『移行の危機にある若者の実像』労働政策研究・研修機構, 186-211.

- 下村英雄, 2002, 「フリーターの職業意識とその形成過程-『やりたいこと』志向の虚実」小杉礼子編『自由の代償／フリーター-現代若者の就労意識と行動』日本労働研究機構.
- 新谷周平, 2004, 「フリーター選択プロセスにおける道具的機能と表出的機能-『やりたいこと』志向の再解釈」『社会科学研究』55(2):51-78.
- 太郎丸博編, 2006, 『フリーターとニートの社会学』世界思想社.
- 太郎丸博・亀山俊朗, 2006, 「結論と今後の課題-どのような政策と研究が必要か」太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』世界思想社:168-98.
- 鶴飼孝造編, 2007, 『新しいコミュニティの構想 2006年兵庫県民調査報告書』2004-2007年度科学研究費補助金研究成果報告書, 同志社大学.
- 山本圭三, 2007, 「若年におけるフリーター・正社員問題の再検討」鶴飼孝造編『新しいコミュニティの構想 2006年兵庫県民調査報告書』95-109.
- , 2009, 「現代大学生のフリーター志向に関する考察-自己効力感の視点から」『評論・社会科学』第87号, pp.95-116.